

## 「と」と「や」

沈 茅 一\*

キーワード： 単語の意味，一方成立，表現，比較，語感

### 要 旨

「と」と「や」は両方とも物事を並べるのに用いられるが、「と」は物事を全部列挙するのに対し、「や」は多くの物事の中からその一部を挙げて、ほかにまだ同様の物事がありうることを暗示するとされる。しかし、実際の用例には、もう少し細かい検討が必要なものがある。

「と」はひとまとまりですべてを列挙する時に用いられるが、「と」で結びつく単語の表わす意味の観点から二つの場合に分けられる。一つは、「と」が成り立つために必ずしも一組の物事を必要としない場合（「と」で結びついて一体言相当の資格をもつ）であり、もう一つは、その単語の意味が成り立つために少なくとも一組の物事を必要とする場合である。

他方、二つの物事を並べる「や」の列挙か列挙に近い用法には、どちらかが成り立てばよいというニュアンスが強いもの、「と」に置き換えることができるが「と」とは異なったニュアンスを帯びているもの、一つの事柄を二つの類義語句を並べて表わすもの、「と」におきかえると文意があいまいになるものなどが挙げられる。

これまでの論説によれば、「と」と「や」は両方とも物事を並べるのに用いられるが、その違いとして、「と」は物事を全部列挙するのに対し、「や」は多くの物事の中からその一部を挙げて、ほかにまだ同様の物事がありうることを暗示するとされている。しかし、実際の用例をみると、表現法などと絡まって、そう簡単にはわりきれないようだ。もう少し細かくみる必要があると思う。

「と」は一まとまりで、文の他のある部分と関係する物事をすべて列挙する時に用いられる。この場合、「と」がかかわる単語の意味という観点から二つの場合に分けられる。一つは「と」で結びつく単語の意味が成り立つためにそれが一体言相当の資格をもち、必ずしも一組の物事を必要としない場合であり、もう一つはその単語の意味が成り立つために少なくとも一組の物事を必要とする場合である。

「や」は、通説のように幾つか物事を例として並べあげるのに用いられるが、その外に列挙か

\* CHIN Boi: 北京外国語大学日本語学部助教授。

列挙に近い用例もみられる。これをさらに細分すると、二つのうちどちらかが成り立てばいいというニュアンスが強いようなもの、並べられた物事が別々に文中の事柄に該当するもの、「と」におきかえることもできるが、「と」とは異なったニュアンスを帯びているもの、一つの事柄を二つの類義語句を並べる表現をするようなもの、並べられた物事以外には同様の物事がないが、「と」におきかえると、文意があいまいになるものなどが挙げられる。

また、「と」による並べの後にも、「や」による並べの後にも限定を表わす副助詞(だけ、しかなど)を付け加えることができるが、その限定の仕方にそれぞれ違いがみられる。以上のことが本稿で扱われている。

つぎに「と」と「や」の意味用法を、それぞれ一方を中心に他方と比べながらみていこう。

## 1. 「と」

### 1-1. 一組の物事を必要としないもの

「と」の並べの形式は以下の三種類で集約できる。

- |                      |         |
|----------------------|---------|
| (1) A と B (と C……) と  | } (用例略) |
| (2) A と B (と C……)    |         |
| (3) A と B (と C……) と～ |         |

(1) と (2) の場合、誤解さえないければ、最後の「と」は省略されてよいとなっている<sup>1</sup>。とくに話しことばでは最後の「と」は省略されることが多い。しかし私の集めた用例では省略しない方が多かったのである。

(3) の場合の用例が少ないが、たとえば、

- ① 橋の工事と教育問題と、縁もゆかりもない二つのものが、県の財政というところで一つにつながっていた。(人 pp. 53-54)
- ② 「どうしたって……兄様、さっき、石鹼を取りに勝手に行くと、嫂さんとお梅さんと、二人で一緒になって私の悪口を言ってるんだよ、……」(生 p. 116)。

例①の「橋の工事と教育問題」は、「二つのもの」の、例②の「嫂さんとお梅さん」は、「二人」の具体的な説明で、それぞれ同格となっている。

「と」は、並べられた物事を一まとまりにし、一体言(体言相当)の資格をもち、文中に述べる事柄に該当する同類の物事が、それだけでそれ以外の存在を認めない。手もとにある用例では全部同時に存在する人や物事、あるいは共同で動作作用を行う人や物事である。

<sup>1</sup> 1. 「と」は各語の下につけるのが本来の形であるが、現代語では最後の語にはつけないのが普通である。(阪田雪子『日本文法大辞典』、松村明編)

2. 並立の「と」は一々の語に付くのが本来の用法であるが、後には下の「と」を省略することも多くなる(近代語ではむしろ省略するのが普通になった)。(此島正年『助動詞・助詞概説』、桜楓社)

なお、「と」の並べに限定を表わす副助詞、「だけ」、「しか」がついた場合がある。たとえば、

- ③ 先生のうちは夫婦と下女だけであった。(こ p. 25)
- ④ 膳の上には汁と卵どんぶりとつけ物だけしかない。(人 p. 245)
- ⑤ 波と風と魚しかいない海の上に、濡れてることなど気にもしていない男が、行儀を守って働いている<sup>2</sup>。(濡 p. 76)

「と」による並べは、もともと列挙された物事はそれだけにかぎるという意味を表わす。だから、限定を表わす副助詞「だけ」、「しか」を加えると、「と」の並べにさらに限定が強まると考えられる。

しかし、「や」にも同じような用例がある。

- ⑥ 彼の立身出世主義は同時にまた、金持ちや権力者だけを尊敬する卑屈な小市民的な生活態度ともなっていた。(人 p. 30)

この用例にも限定を表わす「だけ」が使われているが、これは並べられている二つのもの——金持ちと権力者だけを限定するのではなく、金持ちや権力者、そういう種類のものを限定していると思われる<sup>3</sup>。「や」の「そういう種類のもの」の意味が変わらないから、それでよいのである。

## 1-2. 一組の物事を必要とするもの

単語の中には、その意味が成り立つために少なくとも一組の人や物事を必要とするものがある。言い換えると、そのうちの一つが欠けたらその意味が成り立たないものである。

- ⑦ 私の知るかぎり先生と奥さんとは、なかのいい夫婦の一对であった。(こ p. 26)
- ⑧ そこで、おれと養父とは、きょうがきょうまで、たがいににらみあいながら、なにごともなくすぎてきた。(偷 p. 28)
- ⑨ おれが玉子をたたきつけているうち、山嵐と赤シャツはまだ談判中である。(坊 p. 149)

この三例は人間関係を表わす。

- ⑩ そのふくろは、玄白と良沢との中間に、おかれたまま、一座はちょっとしらけかかっていた。(蘭 p. 196)
- ⑪ 玄関と門のあいだにあるこんもりしたもくせいのかぶが、私の行くてをふさぐように、夜陰のうちに枝をはっていた。(こ p. 97)

上の二例は具体的な空間関係を表わす。

- ⑫ 先生と奥さんのあいだに起こった波瀾が、たいしたものではないことはこれでもわかっ

<sup>2</sup> 例⑤において、魚は動物のために「いない」を使っているが、実際には「A と B と C しかない」の意を表わしている。

<sup>3</sup> 寺村秀夫『日本語の文法(下)』, p. 32, 国立国語研究所。

た。(同上 p. 29)

上の用例は抽象的な空間関係を表わす。

- ⑬ 私はそうかもしれないと答えたことがありますが、私の答えた意味と、妻の了解した意味とは全く違っていたのですから、私は心のうちで悲しかったのです。(同上 p. 295)
- ⑭ 「せんせ、月夜のかにとやみの夜のかにと、どっちがおいしいん?」(二 p. 107)
- ⑮ 先生と呼ぶのと、呼ばれるのは雲泥の差だ。(坊 p. 27)

上の三例は異同，類似，比較を表わす。

以上の九例のように、人間関係，空間関係，異同，類似，比較などを表わしているが，このような関係を表わす単語が成り立つために少なくとも一組の人や物事が必要である。

こういう種類の用例の並べと関係する単語をみると，関係を表わすものには名詞では，「一対，昔なじみ，衝突，仲，あいだ，中間」，動詞では，「会う，にらみあう，談判する，顔を合わせる，へだたる，かけ離れる，近づく，寄せる，かさねる，相対する，切り離す，契りを結ぶ，並行する」などがあり，異同，類似，比較を表わすものには，名詞では「どっち，雲泥の差」，動詞では「比較する，一致する，ちがう」といったものがある。いずれもその意味が成り立つためには最低一組の人や物事を必要とする。それは，その単語の意味が成り立つための共存者，共同者のようなものである。

なお，例⑧，⑨，⑬のように共同で行う動作，異同，類似，比較を表わす単語の場合，一方の人や物事を主語や対象語に変えても意味は変わらない。たとえば，

- ⑯ 私と奥さんとはめったに顔を合わせなかった。(こ p. 42)
- ⑯' 私は奥さんとめったに顔を合わせなかった。
- ⑰ 父と先生とを比較してみた。(こ p. 64)
- ⑰' 父を先生と比較してみた。

例⑯'と⑰'の「と」は格助詞の「と」で，両者を比較すると同じようなことを表わしている。もちろん表現上の違いはある。例⑯，⑰では，対等関係を表わすが，例⑯'，⑰'ではどちらかを中心にして動作，異同，類似，比較を表わしている。

いずれにせよ，並べの「と」と格助詞の「と」は非常に近い関係にある。並べの「と」と格助詞の「と」は発生的には同じものであるといわれている<sup>4</sup>。

## 2. 「や」

「や」は，一般的に幾つかの物事を並べ，言外に同類の物事があることを暗示するとされてい

<sup>4</sup> この「と」は前述の格助詞「と」の与同の用法と本質は一つで，むしろこの並立用法から格助詞が発達したのである。(此島正年『助動詞・助詞概説』，桜楓社)

る。

筆者は「や」の意味用法と形式を全面的に調べたが、基本的な意味はたしかにその通りである。しかし、実際の用例には言外に暗示するものがなさそうなものも数多くある。これは無視されてはならない存在である。これについてはまだとりあげられていないようだ。「や」の通説となっている「暗示あり」の意味用法は繰り返す必要がないと思う。これまでふれていない「暗示なし」のものに限って、筆者の私見を次のように述べさせていだこう。

## 2-1. どっちか一方成り立てばいいというニュアンスが強いもの

- ⑮ 学校の職員や生徒に過失のあるのは、みんな自分の寡徳のいたすところで……。 (坊 p. 71)
- ⑯ かれは、その粗(粗雑)な丸太を地面に立て、柱とした。小太刀や、まさかりで、穴をほることはかなり骨がおれた。(俊 p. 146)
- ⑰ みんな私の顔を見て喜びました。私はまた父や母のいた時より、かえってにぎやかで陽気になった家の様子を見てうれしかりました。(こ p. 161)
- ⑱ 私たちの通る道はだんだんにぎやかになった。今までちらほらと見えた広い畑の斜面や平面が、まったく目に入らないように左右の家並がそろってきた。(同上 p. 82)
- ⑳ しかしその結果は大体わかっている。こちらの言い分は職場を守るといこと、教員定数を確保しなくては現場において義務教育は崩潰に瀕するといこと、その禍根は遠く将来に及ぶであろうといこと、鯨詰教室はますますふえて、教師の負担はますます増大するといこと、しかもこの二年間というもの定期昇給はストップされ、はなはだしい時には遅払いや分割払いまでされて来たといこと、等々。(人 p. 54)

この5例は、「A や B (助)」の形になっている。言外に暗示するものがなさそうだ。この場合は例示とはいえないだろう。このような場合、どっちか一方がなりたてばいいというニュアンスが強い。たとえば、例⑮の場合、少なくとも職員と生徒のどちらか一方に過失があるのは校長の寡徳のせいだ、例⑰では、少なくとも父と母のどちらか一方がいる時より家の様子がかえってにぎやかで陽気になったといっている。もちろんこれらの場合、A と B が同時に(両方)成り立つという可能性も残っている。その判断は文脈あるいは場面によらなければならない。例⑮、⑱ではA と B はそれぞれ複数の物事を表わし、この場合の「や」は不特定の多数の一つを表わすかも知れない。

つぎに挙げる例のように文脈、場面あるいは常識からみて列挙したもの以外に暗示するものが考え出せない場合にも「や」が使われている。「や」を使うことによって表現が柔らかくなるかも知れない。外国人としての日本語学習者はそういう点を十分に心がける必要があると思う。もちろん、はっきりこれとこれをいわなければならない場合には「と」を使うべきである。

- ㉓ だが、その中学生は、どうしてかまだ矜然としない風で、準次の帽子を見た。準次は、その少年から逃げると、便所へ入って、帽子や服の徽章をむしりとった。(神 p. 96)
- ㉔ 「奈良時代」に中央政府は都や地方にたくさんの寺を作って、それらを人々の精神的中心にした。(史 p. 162)
- ㉕ それでは、「人」を表現して、しかも破損によってトルソーとなったものはどうであろうか。そこには明白に首や手足が欠けているのである。(面 p. 111)
- ㉖ たとえば、小学生や中学生の場合は義務教育であるから、家庭が貧乏で学校を続けることが不可能な生徒のためには、その居住地の市町村が経済的の責任を負う義務があり、高等学校や大学の教育のためには、国家が学費のない優秀な学生に一定の金を貸与する制度がある。(日 p. 209)

以上の四例は、暗示するものはないが、「と」を使うとかたくなる。例㉓は、「と」を使うのと同じように両方をむしりとった意を表わす。例㉕では、手足だけが欠けてもよい。あるいは首と手が欠けているのもいい。例㉔の「地方」は複数で、例㉖のA, Bとも複数で、例㉔, ㉖と同じように不特定の多数のうちの一つを表わすかも知れない。

## 2-2. 近似語句の並べ

ほとんど二つの物事を並べているが、それは同じような事柄を、とらえかたを違えて(いい方を変えて)並べる。あるいは間を取るように語調を整える、対句のようなものもある。たとえば、

- ㉗ それが私の煩悶や苦悩に向かって、積極的に大きな力をそえているのはたしかですから覚えていてください。(こ p. 157)
- ㉘ 不平や不満は腹の底へかくして、そしらぬ顔をしていないかぎり、世渡りはできなかった。(二 p. 147)
- ㉙ 自然科学や数理学は、多くの法則や定理を見いだした。(事 p. 163)
- ㉚ 反対に「世界」や「人類」が単なる観念でなく、……。(移 p. 172)
- ㉛ おれはあの男のように、発表ということや、文壇にでるといことについて、少しの苦勞もない心理状態が、かなりふしぎに思われる。(無 p. 98)

「と」にはこういうような用例が少ない。

## 2-3. 「と」と同じ事実を並べている

同じ事柄を同じ文章に片方では「と」、片方では「や」で表現がなされている。ある物事を全部列挙する時にも「と」を使わないで、「や」を使う用例である。

- ㉜ 「大きくなればわかるだろうが、姉上はこの父やおまえのためにせつかく仕合せになれる運を捨ててくれたのだ、自分のためではない、父とおまえのためにだ、……忘れては済ま

ないぞ」(糸 p. 122)

この用例では、並べられている事柄が同じで、二カ所とも「と」を使ってよさそうであるが、「や」を使うと「と」より柔らかくなる。話し調子がつくなると「と」を使う。また、表現上の違いもあるかも知れない。後の「と」の方は自分のためではない、「父」と「おまえ」二人のためにだ、「父とおまえ」は共同の存在としてとらえられている。それに対し、前の「や」の方ではそうでなくて、すこしばらばらの感じ、別々のためにもとれる。

㊸ かれは、成経や康頼が、親切にのこしておいてくれた狩衣や指貫を、海中へとりすてた。(俊 p. 145)

㊹ 成経と、康頼とが、横になっているいぎたない(だらしな)いようすを見ていると、俊寛は意地にも、そのまねをする気にはなれなかった。(同上 p. 135)

事実として主人公(俊寛)をのぞいて二人しかいない。例㊸に「や」が使われているのはA、Bがそれぞれ親切にのこしてくれた意、あるいはA、Bはそれぞれ狩衣と指貫のうち的一方か両方をのこしてくれたかも知れない。もし「と」を使うと、AとBが共同でなにかをのこしておいてくれた意味になる。例㊹の「と」の並べは成経と康頼とが、二人でいっしょに横になっている目の前のようなすをいっているの、その意味では「や」が使えない。もし、「や」を使うと二人以外にまだだれかがいるかも知れないという暗示が出てくる。

以上、みてきたように、「や」と「と」で同じ事柄を表わす場合、「や」が言外に同類の物事がありうることを暗示するニュアンスがあるので、「や」の表現が余裕をもたせ、婉曲的な柔らかい表現であるが、「と」を使うとかたすぎて不自然になる場合がある。とはいっても「と」と「や」では違いもあるのでこういう点に注意する必要がある。

#### 2-4. 表現上の必要から「や」が使われている

なにかを並べる場合、言外に暗示するものはないが、「と」を使うと、意味がはっきりしない、あるいは誤解される恐れがあるから「や」を使っているものもある。

㊺ 「では、帰りますから、どうぞ、お母さんによろしく。」とおっしゃって、そのまま、警防団長の大内さんやその他の方たちと一緒に帰る。(斜 p. 33)

㊻ 私はその手紙を出すときに決して先生の返事を予期していなかった。出したあとで父や母と先生のうわさなどをしながら、はるかに先生の書斎を想像した。(こ p. 62)

㊼ 今になって父や弟と別れることはわたくしにはできません。(糸 p. 117)

この三例は、文中に格助詞「と」が用いられている。さらに、並立助詞「と」を使うと文意がはっきりしなくなる。たとえば例㊻では、私は父や母と先生のうわさをするという意味であるが、「と」を使うと、私は「父と母と先生」のうわさをするようになり、意味が変わってしまう。

㊽ とうとう、しまいには、猪熊の婆や同類の盗人が、牢を破ってあの女を救いだすのを、見

ないふりをして、通してやった。(倫 p. 26)

この例において、もし「や」を「と」におきかえると、盗人が猪熊の婆と同類になってしまう。どうしても「と」を使いたい場合には「と」の後に「，」を入れなければならない。

以上、「や」の列挙か列挙に近い用法をみてきたが、集めた用例では全部「A や B」の形の用例であった。あいまいさや誤解を避けるための表現上の問題を除けば、並べられた二つの物事のうち、どちらかが成り立てばいい、または A と B が別々に文中の事柄に該当する意味にとれる。

並立助詞の「や」は「同種の語を列挙する中間に用いて漠然とした並列を表わす」<sup>5</sup>。話し手(書き手)が並べる物事の外に事実としてまだ何かあるかどうかを問題にせず、あるいは分からないから「や」を使っているかも知れない。とにかく「と」のように明確に、同時の存在、共同の動作、作用を表わす物事でないような場合には、「や」を使うのであろう。言外に暗示のない列挙の場合にも、「や」が使える。

### 参 考 文 献

- 鈴木重幸(1972)『日本語文法・形態論』、むぎ書房。  
 寺村秀夫(1980)『日本語の文法(下)』、国立国語研究所。  
 国広哲弥(1967)『構造的意味論』、小学館。  
 杉村明編(1971)『文法大辞典』、明治書院。  
 国立国語研究所(1951)『現代語の助詞・助動詞——用法と実例』、秀英出版。

### 用例出典

- 人……石川達三『人間の壁』、新潮文庫。  
 こ……夏目漱石『こころ』、ジュニア版(41)。  
 坊……夏目漱石『坊ちゃん』、旺文社文庫。  
 二……壺井 栄『二十四の瞳』、ジュニア版(5)。  
 濡……幸田 文『濡れた男』、現代国語一、東京書籍。  
 偷……芥川龍之介『偷盗』、ジュニア版(37)。  
 俊……菊池 寛『俊寛』、ジュニア版(25)。  
 蘭……菊池 寛『蘭学事始』、ジュニア版(25)。  
 無……菊池 寛『無名作家の日記』、ジュニア版(25)。  
 生……田山花袋『生』、日本の文学 8、中央公論社。  
 事……林 四郎『事実について』、現代国語新修二版、明治書院。  
 移……中村光夫『「移動」の時代』、現代国語新修二版、明治書院。  
 神……中村光夫『神の道化師』、日本短編小説昭和(下)、新潮文庫。  
 史……吉田弥寿夫『日本の歴史—1』、あたらしい日本語、北京出版社。

<sup>5</sup> 市古貞次他編『国語大辞典』、p. 2360、小学館。

- 面……和辻哲郎『面とペルソナ』、改訂現代国語三、明治書院。  
日……国際学友会日本語学校『日本の教育制度』、日本語読本三、国際学友会。  
斜……太宰 治『斜陽』、新潮文庫。  
糸……山本周五郎「糸車」、『小説日本婦道記』、新潮文庫。